

風来山人著

清元 名曲 梅の春風



大榮堂出版

336487

せんどもん 関書を補綴し校正をなすは其の
のけりき 関書を補綴し校正をなすは其の
髪雪成頭きて雪の許来静水し唐人の苦心を
おも 心に 心に 心に 心に 心に 心に 心に 心に
怪しむるに 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を
浅者も 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を
りこじん 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を
里巴人の曲玉玉訂して蓋し其の苦心を
りう 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を
流の証傳記る 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を
い 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を
意を 唐滅あり古語に伝わり其誤謬を

268.48
U545K

子字より圖書を補綴し校訂し合編しむるの甚難

難事なりて其の詳を詳述し之を著しむる

怪しむるに廣減あり其語を記述あり其誤謬を

後者の考案遂に校訂の善を供せしむる理言俗語下

里巴人の曲本を訂し其善を著しむる音曲諸

流の証信語を採りて其善を著しむる減しを著

意を著しむる名工雑言の妙は其善を著しむる備工等

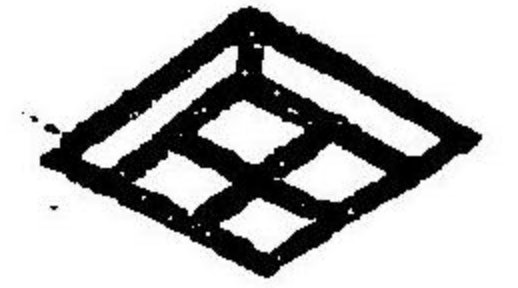
既に現行の著作として反つて原籍を嘗て嘗て嘗て
一文の戦歴の事と自ら著す本拠所あり然るに
りし今の漢籍漢書某書に嘗て現今清朝の事と
一漢書に嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
の稱号あり故に漢曲に於て其を漢書に記す
おんれ作者の原意漸くは嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
村田正風が嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て

田の蘭の原書あり其の遺蹟を嘗て嘗て嘗て嘗て
風来りて嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
を撰り嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
編る書に嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
末に上は嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
編る書に嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て
作者の妙書を解して嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て嘗て

綴り 華の柳彼梅の春は幸ひなるや 風調雨順 俗
海り 青白妙文 演出中の巨擘ありて 尚ほ第一
世す可き心 往々傳ふれ 漢のあり 平山人が 老練の心切
情く 諸書を引証し 古人が 佳作を 今もあはれと 愛ふ
風来三妙の 業系は 海記を 以て 起るべきを 色

明治十六年十月

梅道人 喜笑誌



叙言



暢齋が 姪 鑑真齋が 俚諺抄ハ 讀者て 是れ 勞苦
の ほと ぼり 忠信 著る 越前 澤村の 澤村 とももの 世に
せん 且 流行き 経史子集 久し 梅史小説の 久し まで
も ほと 海ふも 妙せらる 著る 讀書 見書 妙なる 記
録りに せん 何と なる 一の 書 愛 某の 主 個 予 某 處
を 讀き 梅の 著の 注 釈を 命じて 著る 清 あり 自己
才 短く 學ぶ 淺 著る 著る 固 著る 著る 固 著る
二種 二種 乃 書 藉 著る 著る 撰 引 著る 著る あり 著る

世の女子が此世に生れしをば
 義を知らず一助もあらず
 編者よ
 此世に生れしをば
 義を知らず一助もあらず
 編者よ

明治十年春水月の中流日本
 松乃頭なる紙書あり

風来山人記



紙書
 古

清元名曲梅の春通解

東京 紙齋堂風

清元曲節の起原

清元譜節の原富本より分派たるものにして今其子弟流
 ぬる一初代清元延壽太夫の幼名吉五郎と稱し元來江戸(今東京)横山町
 よて茶油を鬻ぎし岡村藤兵衛の一男なりしが天稟淨瑠璃を好み其頃
 高名なる清水延壽齋に從ひて出藍の名譽ありしより頓て師が前號
 齋官太夫の名蹟を承嗣て延壽齋の脇を勤め本石町三丁目に住居せ
 り(延壽齋の元來武家より成長し後米商買となり通稱清水屋太兵衛と云
 ひ神田川又南茅場町に住居て初代富本豊前様が門人なり二世豊前太
 夫午之助たりし時その嘱托に依て後見をなし富本齋官太夫と云し
 後不和となり本姓清水を名乗り弟髪して或縉紳より賜る所の延壽



齋の名を以て號と号享和二年五月十八日七十三歳にして終れり
 本所中の彌成就寺に葬る又延壽太夫ハ師が没後故ありて文化五戊辰
 年豊後路清海太夫と改名す此時徽章に青海波を用ひしとぞ然るに師
 が清水の姓絶ん事を太く歎き其餘裔荒井某氏の懇望に因て是より清
 水と名乗る同く十一甲成年市村座より出勤し時故ありて又清水と改め
 清元這ハ清水の一字を取て清元と云り延壽太夫と號し一派の曲節を
 語り出して世に賞せらる薙髮して二世延壽齋と云ふ文化八年未年五
 月廿六日に終れり法華宗深川淨心寺に葬る一男己佐二郎ハ榮壽太夫
 (此榮壽の名も或籍紳より賜る所ありとぞ)と號せしが父が没後二世延
 壽太夫と改名し亦世に賞せらるゝ事甚だし新橋餌鳥屋敷今神田區餌
 鳥町に住居て饅節を驚ぎ通稱岡村藤兵衛と云ふ弘化元甲辰年の冬亦
 通稱藝名共に太兵衛と改めり一男某ハ父が技藝を嫌忌ひて早世す其

頃淺草今戸町の材木商藤田屋繁次郎現今淺草區長町田今亮氏の實父
 ありなる者只管延壽の名と懇望しかば則ち渠に其名を譲與て三世延
 壽太夫となせり太兵衛安政二乙卯年九月廿六日五十四歳にして終り
 又三世延壽太夫も程なく没したる後太兵衛の妻いそなる者善く其一
 家の曲節を傳へ居りしが安政五戊午年一女葉に谷中善光寺坂下町の
 質商賈三河屋齋藤源之助を婿とあして岡村の家を嗣しむ則ち現今の
 四世延壽太夫是なり

清元一流系圖



清水延壽 齋初富本齋宮太夫
通稱清水太兵衛

初代 清元延壽太夫初齋宮太夫後延
壽齋幼名吉五郎

二世 清元延壽太夫初榮壽太夫後太
兵衛幼名己佐二郎

三世 清元延壽太夫通稱町田繁次郎

四世 清元延壽太夫幼名齋藤源之助今
岡村齋兵衛妻女夫

清元 磯 女太兵衛妻

清元 葉 女太兵衛女四世延
壽太夫妻

梅の春

梅の春の名曲ハ曩歲に狂歌師千種庵勝田諸持(一)中節を好みて都一閑齋と號し後一派を起して宇治紫文と云りが梅の春考にこれを辨じ又一筆庵浮世繪師溪齋英泉の戲號ありが稽古三味線と云る小冊子にも其意を解し事ありと聞しかと素來一時の著述にして此二書世に遺る心の稀なるより只長府侯(毛利元義)の作文なりと云傳へて特別に風流粹子の賞賛する所なれどもその實ハ狂歌師四方歌垣貞顔大人が侯に代りて作れるを今諸書に據て熟考ふるに天明寛政の年間江戸京橋數寄屋河岸(今東京京橋區元數寄屋町)に四方某と云る最と繁昌の酒店(現今も同店の餘名諸町)遺れり既に新富座狂言作者竹柴瓢助氏の以(前)和泉町四方酒店の主個にして戲作を好み初代柳亭種彦の門に入り(文)亭梅彦と號せしより世人呼て四方梅彦と云ふありしが同時赤本(今

の合巻なり)の口調にも鯛の味噌酢に四方の酒古語に酒をわりと云る
事ハ今も遠境の地の方言は遺れり(飲かけ山の郭公示々あを書出しよ
り既に太田蜀山先生もその流行を穿ちて自から狂名と四方赤良と號
されしと云り其後門人四方側(狂歌の連中を何側と稱するハ今も發句
なまよ何側何連といふは同じ)の連長鹿爪眞顔大人竟に師が初名四方
の號を承嗣て是より四方眞顔と改名せり然るにその社中梅の戸眞門
君(即ち長府侯の表徳なり)が判者披露開庭の時此梅の春の新曲を初代
清元延壽太夫に命トて譜節を附さしめ當日席上に於て謠初させ給ひ
し以降殆ど七十餘年の星霜を経たりしかば其餘流ますく行はれて
今尙全國都鄙となく昔くも歌曲を嗜む者必らば此曲に通ぜされハ酒
席の興を缺くは至り又近頃忝けなくも海陸軍の奏樂の一部に入りて
和洋合奏の嚆矢とせられしハ實は是れ清元一派の宏大なる榮譽あり

と謂ふべし

巴即ち巴即ち(なり)の眞顔

大人が師の蜀山先生より譲與れたる狂名四方側の徽章にしてその扇
巴の四方は廻るといふ意と下旬に文車と受け當日侯が判者披露開庭
の形狀を雲上の事に比へて云述しあり但し文車の禁中書籍を積て輓
廻る器具あり○晋張華傳に曰く愛書籍嘗徒居載書三十乘天下奇之又
同書に五車書とあるハ即ち我朝の文車の事なり○徒然草におほくて
見らるしからぬハ文車のふみ塵塚のちりとあり

上旬に文車といへるより聽色と受けたるハ

一体文車の緒總じもに必らば紫色を用ゆるものなれば茲に示いひ其
ゆるしの色も漸やく昨今許されたるものぞと侯が判者の一列は加ハ
りしを自から卑下して云述しなり但し聽色の紅にても紫にても其色

薄きを云り○伊勢物語に色ゆるされたるありけりと有り又眞淵翁云く色ゆるされたる禁色とて染色と織物の二ツあるをそれ聽されて着るを謂ふ○延喜彈正式に曰く凡諸禁色者惣雖下衣不聽服用とあるハ色なり(此前後染色の禁を云ふ條なり)又同書に有著禁色者耶謂綾羅綿綾之類とあるハ文織物ありされハ此二種を聽さるゝを爾いふ事明けし○後世の或裝束抄に禁色といハ深紅深紫の事とのみあるハとるハ深紅深紫の外にも青色麴塵赤色白ツルバミ等ハ上の御料の色なればゆるしなくてハ着ぞ(下略)

公衆の心の中のみ氣張れども昨今の事おれハ他の狂歌を批評するも

侯が判者の列に入りて胡盧を受

けま下と心中のみ氣張れども昨今の事おれハ他の狂歌を批評するも心耻りしとの意を述べ其心中のみ氣張ると云るよりは霞と云かけ又霞と云るを受て引と云ひその引といへるより三絃と點式の兩器に

比へて爪じるしと云述となり但し點式といハ狂歌の巧拙を批評して墨を引き又印章を捺を云り

雪といふ詞を出し其雪の梅の戸と侯が狂名の表徳に通はせ且下句

前條に爪じると云るより

の朝暎をも形容して薄弱匂ふと云りけ又その朝暎の色をさして赤間と云述しかり但し赤間の同侯の領地にして長州下の關(今馬關)を云り

赤間が關の硯石の名所にして

赤間が關の硯石の名所にして

古く詩歌なにも其海面を硯の海とよめれば青海波といふ意にて青墨と形容して海上の平穩なる景狀を云ひ又上句に硯の海とよめらるより赤間と對岸なる豊前國門司が關といへる名所の門司と文字とを通はせ且青墨と云かけしより下句に席書試業と受けて新年

の景状を云述しなり但し試筆とハ正月二日若水もて墨を摺り新禧の詩歌を書初るを云ひ又席書とい臘月徒弟等師の前より集て揮毫を云り○舊事紀に長門の穴門に作る和名抄に元穴の如き水門ある故に孝徳帝の御世まで穴門と云しを其形ちの長きに因て後に長門とも云しなり又古事紀に長門國と豊前國との間の海門にて筑前國の北面の海より山陰道の南門に入る門あり穴門と名に負ひたる故に今川了俊が道行よりと云る書に霜月の廿九日長門の國府を出て云々さても穴門の豊浦の都と申しはべる事ハ今の赤間が關と門司が關とのあはひの山一ツなる其中に纒に潮の満干の路はかり穴のやうよて侍るにその岸の東西に人家繁かりけり穴門といさて云かりけりそれと皇后の軍の御船通り難かりけるに御船よそひて後一夜の程に此穴門の山引こりれて今の早柄の渡りとなりぬと

云ふ是即ち海門といふ意なるものをやと云り又仲哀天皇記に洞海とあるもこの穴門を云へり

筆草の多く長門紀伊勢などの海濱に生じて其莖恰筆頭一髪 前條に席書試筆と云かけ

しより筆草と受け又立春の景状を若和布疋示々と云述しなり但し筆草の多く長門紀伊勢などの海濱に生じて其莖恰筆頭一髪なる海藻あり○赤間が關早柄の神社今ハ豊前國門司が關に属せりにて毎年十二月大晦日陽曆三十一日の夜同社の神職等松明を點して海中に入り疋出す所の若和布をもて翌正月元朝陽曆一月一日その神前ハ備ふる古例あり是を世に布疋の神事と云り

鷗の水上に泛べるとと云かけて示々と受け又一二三四と其鳥の夥 前條に春けしと云るより氣の浮たつと

多群集る景状を云述しかり但しかまめとい古語に鷗を云り

筑波峯の常陸國の名山

前條に一二三四と云ふより五を早晚と通へせ又吾嬬へ

着くと云かけしよりつくばねと受けたるハ遺羽子を俗ハ羽子をつくと云るより筑波峯に通へせ彼古歌を引用し且彼面此面を見るといふ意より都鳥を云述しなり○吾妻ハ神代記ハ東國をよめり吾嬬の義日本武尊の故事より出て景行記に委し吾夫をわがつまとよみし事も日本記に見えたり又同記に上野國碓日坂より東を望ませ給ふより山東の諸國をいふと見ゆ又同國に吾妻郡ありて其流れを吾妻川と古事紀にハ相模國足柄坂にての事と日本紀略に廢相模國足柄路開管荷途と見え萬葉集にわしがらのみ坂かしこみくもりよのあがしたばへをこちてつるか

とよめるも此故事をふまへたるあり號其國謂阿豆麻也とあればこの相模ばかり歟○棟梁集に云く山東とハ碓氷の山の東といふ東山道の山より東なればあるべし日本記に山東と見えしハ坂東の國とぞもれしなべていひたれと後ハ上野下野出羽陸奥よりぎれる名なり吾嬬ハ坂東山東にこたれる稱なれと出羽陸奥にいへるためになしあづまの道のはてある常陸也とよめるハこのゆゑにこそ云々○筑波峯ハ常陸國の名山にて山上に二尊と祭れりと云ふ新撰萬葉に鹿島なる筑波之山とあるを六帖につくまの山と見え筑波川を筑摩川と書き千隈川を筑摩川に作るハ同韻通なり又常陸風土記の説に筑波の神社ハ木花咲耶姫を祭ると見ゆ又同山に男休山女休山ありその巔き相隔つ十八町なり女休山の下に潮呼の鐘あり此山より海に至る十五六里あり然るよ山に潮來などいひ傳ふまハ荒和布

なご石につけり云なり海鹿島と近しとす男体女体兩山の間に
りみなの川流る下に至りてさくら川と云ふ戀をよめるによれば二
尊を祭るに近し又さくら山に多し櫻川の名よれば木花咲耶姫を
るべくや菅家萬葉集に

鹿島なるつくまの山のつくくと

我身ひとつの戀をつみつる

或につくまの神のこ見ゆ信明集に

年を経て君に心をつくま山

峯や雲ぬに思ひやるりな

波の麻と通へればつくまともいふなり又茲に筑波峯のかのもこの
もと云かけし左に記載る所の古歌より引用しものならん
筑波根のかのもこのふに影のあれと

君が御かけにしく影のなし

○都鳥の諸國に多くあれどもかの在五中將が名詠に因て武藏國隅
田河の景物とす元來鷗の異名にして其羽翼灰色なると脊腹白く兩
羽の續き黒色じありさればその形貌甚だ幽雅たる故に都鳥と號け
しと云り或人云く此鳥に大小二種あり大なるは鷗の如く小なるは
鳩の如しと又東國の海濱に居るもの大鷗にして其啼聲猫に似た
るより土俗呼で濱猫と云り即ち食料とを又此隅田河に居るもの
小鷗にして平日に遠く海上より波の靜穩なるを求め來りて茲に泛
び遊べりしを○舊本伊勢物語に京鳥築塹草に城鳥に作る真淵翁云
く古本は鶴とあるは草書より書誤謬るものならんと八雲御抄藻塹
草等に都鳥の隅田河ならでも京近き河よありと云ふされたりされ
ば鳴海瀾尾張越の海(越後)志賀の濱(近江)飾磨(播磨)及び難波堀江高津

宮輪田御崎(今和田岬)と書り(攝津)等によみ合せり又和泉式部が家集にも和泉よ下り侍りけるに都鳥のはのかに鳴ければと有り○古今著聞集に院の御隨身奏頼方みやことりをある殿上人に参らせたるを成季にあづけられてはべり食物などもあらずの虫をくはせはべるも所せくおほえて小田河美作守茂平がもとへやりて飼せはべりしを建長六年十二月廿日前相國富小路の亭に行幸ありと次の日相國みやことりをめして観覧に備へけるときおとゞ女房にかはりて

すみた河をむとしきし都鳥

けふの雲井の上に見るかな

前三河守卜部兼直もおかト和歌を上る

にどりなき御代にあひみるすまた河

そまける鳥の名をたづねッ

○丙辰紀行に都鳥ハ角田河のものかれハ好事の人とりて家に飼てはべるを見るにまことに嘴と足と赤き鳴の大きなりこの鳥蛤を好みてよく食べるなりと云々○伊勢物語にかほゆきくして武藏國とまもつふさの國とのなかにいとおほきある河なり夫とすみた河といふそのかハのはとりむれるておもひやれハ限りなくとほくも來にけるかなとさびあへるに渡守はや舟よのれ日も暮ぬといふにのりてハたらんじをよみか人物わびしくて京よおもふ人かきにしもあらき然時しも白き鳥の嘴と足と赤鳴の大なる水のうへにあそびッいをくふ京にのみえぬ鳥なればみな人見えらば渡守に聞ければ是なんみやことりといふをまゝして名にしおろしきことハん都鳥

我思ふ人のありやなしやと

とよめりければ舟こそりてあきけりとあり是即ち在五中將業平朝臣が隅田河にての名詠なり○或人真淵翁一都鳥の事を問ふて云く古今集にハ川の邊りにあそびけりとありて道理明けし又伊勢物語にハ水の上にあそびてと云へハ足見えしやと翁答へて云く此鳥ハ鷗一群集ツゝあそぶ故に飛たつも邊りに在もあるべければこの問ハ頑なしこれハ鷗あるを忘れんとてや詞を添つらん云々○回國雜記よかくて隅田河のほとりにいたりて(中畧)猶ゆきくて川上にいたりればりて都鳥尋ねまむと人々さそひけるをどにまかりてよめる

事とハん鳥だにみえよ隅田河

都こひしとおもふ夕べに

道與准后

おもふ人なき身かれどもそみだ河

同

名もむつまじき都鳥かな

○武藏野記行にやうくそみだ河にもつきぬ河面を見ればまことよ白き鳥の背とあしとあかき鳥のむれるて魚を食ふありむかしおもひ出て

都鳥すみた河原に舟のあれど

北條氏康

たゞ其人の名のみありはら

上句に都鳥と云かけし

より彼在五中將が古歌を引用ていさごとくハんと受け又その惠方のよきを吉原と通いせよろづよハ原三谷堀と地名にかけて云述しなり但し陰曆にて惠方を明の方と云ひ明の方よろづよと書るハ陰曆の套語なれば示云るなり○惠方の即ち吉方の義よて日吉をひ

えと云が如し又兄方と書て陽干の方を歳徳のある所とするより出たりと云り○紀事云く陰陽家因來年元支干而四方間考吉兆之方是稱得方云々○吉原倡妓町の起原を尋ぬるに慶長の頃江戸(今東京)に三箇所の倡妓樓始めり京都(今西京)六條より移れる者鎌倉河岸に在り又駿州彌勒町より移れる者麴町にあり戸數共に十餘戸に過す中にも大橋柳町に在る者二十餘戸にして最も大ひなりとす其後攝州伏見和州奈良等より追々移來りて所々に散在すと云り又或書據れば同時駿州元吉原驛より倡樓を始めんとする者二十餘人江戸に移りしが其頃未だ定まれる女間もなく倡樓所々に散在せしを彼輩官府に訴へて京橋具足町の東泥沼の地を築理め一方に口を設け南の側を角町(今炭町)北の側を柳町と云ひ又中の通りを仲の町(今も此邊りの町を中通りと云る)自づから其舊稱を失はざる後證なり

とぞと號け此地に女間を開發と云り其後慶長十七年に至り相州小田原の産庄司甚左衛門と云る者幼名を甚内と云ひ元來北條家の臣下なりしが主家滅亡後江戸に來りて移り住所々の倡樓を一所の内圍ひ込ん事を思ひ起し翌十八年此旨を官府に出願せしに元和三年漸やくその許可を得て葺屋町の下に二町四方の地面を賜はり始めて女間を定めしこれを吉原と號けり(今の和泉町高砂町住吉町難波町等ハ其舊地にして現に泥濘河岸の大街渠ハその女間の外溝にして又通油町邊を大門通りと云へるも其頃吉原に通へる道筋の舊稱なりとぞ)又菊岡沾涼云く此地元來泥沼にして萱葎の繁茂たる地を開發し故葎原と云べかりしを葎を吉の字訓に換え賀して吉原に作るとも或ハ駿州元吉原驛の者移りしより此名ありとも云り然るに其後江戸府内漸次に人家延蔓しかば竟に明曆二年の冬淺草反

圃の代地を賜はり翌三年の秋八月現今の地に移轉しより更に新吉原と號けしと云へり○三谷堀(舊記に山谷堀とあり)の淺草待乳山の麓を繞りて今戸橋と山谷堀の中間にあり其河岸に船宿軒と並べ日夜吉原通ひの遊客と送り迎ひして最繁昌なりしも今の衰微て寂實の地となれりされハ猪牙船を山谷船と云ふハ往時山谷山之宿邊に吉原の倡家假宅せし頃より始りし名ありと又散茶船と云ふも女郎買船といふ義よて二挺だち三挺だちとて舟子を増し速櫓を押する事ありしが彼吉原雀(長唄又清元)の文句中にも此事を引用て作れり又其頃の遊客の鼻紙を纏頭と投じて火繩箱(煙草盆なり)の中に入れ川風に散亂さするをもて宏大なる伊達とせしとぞ這ハ三谷堀ある本文に係らねど因に茲に記載せり

三谷堀の船通ひを

三谷堀の船通ひを

寶船の通ふに比へ又吉原の初買によき初夢をみるといふ意より三重布團と受けて花街の形狀を云述しかり○初買とハ正月二日初めて物品を買ふと云ふ茲にハ吉原をさして云れハ當日花魁の狎客が各自全盛を競ひ飾夜具を積み総纏頭を投じて倡樓に登り娛樂めるを云り○紀事に曰く凡初夢者自大晦日夜至元旦曉之夢也故舊年晦日之夜禁裏貼畫船於白紙而賜官方及諸臣地下賤亦以畫船布臥榻之被底寢今晦日夜有吉夢則來歲得福云若見惡夢則翌朝(元旦之朝也)付是於流水是謂流惡夢和俗斯船内畫種々珍寶故稱寶船近世是亦銷梓而兒童賣市中大呼寶船々々是又中華紙船之類乎○夫木集に年くれぬ春來べしとハおもひ寐の

西行

まさしく見えてかなふ初夢

三谷堀の

前條に寶船と云ふより七福神の内なる辨財

天の艷美容貌を初買の花魁に擬てその對妓と添臥せざるの意と云述しなり但し辨財天の七福神の一個にて寶船の繪にもこれを畫きて世人の能く知る所なれば茲に省きて云ひき

綾羅錦繡をもて幾重

も積累ねたる飾夜具を花の錦と形容して云述しあり但しはたちばかりとあるハ伊勢物語より引用たるにて次項に出せり○伊勢物語

の富士と云る條にその山はこゝにたとへハひえの山をはたちはかり重ねたらんかたちして形は擡じりのやうにまんわりけるとあり

蓬萊とも祭ふべき富士山を後面に眺望て家

居すればとの意を云述しなり但し家固との新居移住の祝宴を云り

○富士ハ日本紀に不盡と見え又靈異記に富峴と書り都氏の富士記に山名富士取郡名也と云り○萬葉集に天地の分れし時ゆ神とひて

富士山の事を云しものなるべし

高く貴き駿河なる布土の高嶺

とよめれば世に孝靈天皇の時より漏出たりといふハ信ぞるにたらし

き元來甲州の山なりしにや同州上吉田村表口に鳥居あり高さ四丈三尺也三國第一山と云ふ額懸れりと聞けり又駿河大納言卿道法を改めさせらるゝも同州上吉田村大鳥居より山頂まで三百五十七町十七間と云りされは是を表口と云るなり○宋景濂の詩に

同州上吉田村大鳥居より山頂まで三百五十七町十七間と云りされは是を表口と云るなり○宋景濂の詩に

る所と塩尻といふと云り○盛衰記に白鳥川原を打出て志ほとりさ
まへあゆませ行と書るの信濃小縣郡に今も塩尻てふ所あり塩尻嶺
より西ハ筑摩郡なり富士山も見ゆ○真淵翁云く此ハさまとりに云
る事侍れども總て取がたし只色葉和難抄になりハ志ほとりのこと
と云り一説に鳴者ともよむべし富士の鳴澤と云て上の池木と火
と聞ふて夥たしく鳴なり志ほとりハ川尻と云ふて海へ流入るにも
おびたしく鳴れハあり又一説に山のかたちなり北國にある壺塩
といふ物うつ伏たらんやうにせるとぞ尖りて高きを云ふと云々下
畧○春海翁云く志ほじりの塩尻嶺て砂を一所に搔よせあるをいふ
とさもあるべし信濃の鹽尻嶺もその形ちより號けたるあるべし鳴
ハ平穩ならん

又ささのまげはんにとハ眞實の義よて鄙も都に勝るといへ

る意をまはにかけ云述とあり但し田舎ハ田居中の略まはに
眞柴にて眞葛眞萩など同しくまハ添たる詞なり○日本紀に田舎
をよめり田家も同じ萬葉集ハ居中と書り田居の中といふハ韻會
に邑居爲市野廬爲井と見ゆ伊勢物語に中るなかじも見えたり○全
新兵制に載る歌
事たらぬ人も都に有ものを

あなかよそむじさのみ嘆きそ

○書言故事の注に吾伊ハ夷那何の類是也ハ不聰明者口訥讀書述遺故
有此聲也と見れたれハ偏土の音をもていふにや

とぞ今まはれらるるまげはんにと

上句に眞柴焚くも云か
けしより橋場今戸の甄

者陶器匠ハ軒毎にたつる煙りを朝けふりと受け又かの仁徳帝が浪

速津の御製を引用て下句につゞと竈も賑ふ示々と云述しかり○橋
場ハ舊名石濱にて同所神明宮の邊りより南の方を今戸と云り又事
跡合考に石濱の地ハ今の塩入と唱ふる處ありと云々○義經紀に治
承四年九月十一日右大將頼朝卿下總國より武藏國へ打越給ふとわ
る條下ハ石濱と申す處ハ江戸太郎が知行所なりと云々同書に江戸
太郎重長ハ八箇國の大福長者とあり則ち重長ハ畠山庄司重忠の一
族にして其頃豊島郡江戸の地も一圓に所領の内ありと見たり其
後千葉家の所領となり代々是を知行せしかり(永祿二年小田原北條
家の古文書に太田新六郎同大膳亮所領の中ハ千束石濱の名と加へ
たり)又同書中同年同日(東鑑に)同年十月二日頼朝太井隅田兩河
を涉らるゝとあり太井ハ刀稱川の事にて更級記にも出たり頼朝公
隅田河を越て下總國より武藏國へ赴き給ふ時二三日の雨に洪水岸

を浸し軍勢を渡し兼たりけれハ武衛江戸太郎重長に仰せて浮橋を
係しめんと重長わへて諾ハ依て千葉介(常胤)葛西兵衛(清重)の兩
人江戸太郎を助けんとて知行所今井栗川かめなしろとまど(栗川か
めかしろ)とまど共ハ未詳からどと云より海人の釣舟を多く登せ江
戸太郎が知行所なりける石濱に折節西國船の着たるを數千艘集め
三日の中に浮橋を組てけれハ佐殿神妙なるよし仰せられ太井隅田
を打越て板橋に着き給ふとあり(往古ハ隅田河の海に續きて海村な
り)事ハ同記の文義にても知るべし○夫木抄に

隅田河むかしハさかき今こそハ

光俊

身を浮橋のある世ありけれ

其詞書に云く此歌ハ康元元年鹿島の社にまうせけるに角田河の渡
りて見れば彼とたり今ハ浮橋とわたりたりけれハとありされハ盛

衰記及び光俊が鹿島紀行等の書に載する所の浮橋の假初に設けたるものなるべし同記及び太平記等の書にも橋場の名は見はる橋場の名をそらくの道灌下総千葉家を攻る頃より越りしものからん歟
○梅花無盡藏詩註に曰く隅田在武藏下総兩國之間路傍小塚有柳道灌公爲攻下總構長橋三條云々

獅子舞

前條に賑ふと云りけしより太々神樂門禮者と受けて新年市中の景状を云述となり○太々神樂の事ハ那珂通高氏が説に云く伊勢國吾鞍川村より獅子の假面を被り來り舞ふ者あり世は太神樂と稱す此舞何の時より始まりし事を知らば中山傳信錄に中秋明の冊封使を宴する第六遍毬舞の條より引二青獅登場旋撲と見ゆれば其來れる事既に久し予謂ふ獅子ハ西域の獸なれば或ハ浮圖氏の傳へし所ならんと後卯花圖漫錄を

見れば陳氏樂書と援きて唐太平樂謂之五方獅子舞獅子獸出於西南夷天竺獅子國縷毛爲之各高丈餘人居其中像其俛即馴押之各二人持繩乘拂爲習弄之狀五獅子各形其方色百四十人歌太平樂舞以足持繩者服節作昆崙狀と云ひ又獅子舞の圖を載せて人これを使ふの體ありと云へば獅子舞ハ唐より出て浮圖氏より始まる者に非ざる事を知らるに足れり我邦の樂ハ初乎と竹葉とを以て節奏を成るに過ぎざして推古天皇の時眞野首弟子等始めて吳國の伎樂を學ぶ既にして犬上の御田鍬樂を隨より傳ふ後二百餘年を経て藤原貞敏唐に入り音樂を習ふと云へば太平樂の我邦に來れるも亦必らば此時にありとからん散樂の石橋及び越後獅子角兵衛獅子等の稱皆未だ此より出でぬあるべからば越後ハ國を以て著るゝ者にして角兵衛ハ工人を以て稱せらるゝ者なり宮川政運の漫筆に愛閑樓日記と證として

武藏國一宮の氷川神社、天下一角兵衛作之と獅子頭の角に雕る者ありと云り、當時工人皆自から天下一と稱して鏡を鑄る者最も多く又鹽を入れたり瓦壺の銘にも天下一塚みなと藤左衛門と雕りし者あるに至り、天和七年七月に及びて始めて諸職人淨瑠璃語の類天下一の號を停止せらるゝ武江年表に見えたる天下一の號、獨角兵衛のみならず事も亦觀るべきなり、噫、諸藝其天下一を以て自誇りし者、今皆煙滅知るべからざりて、獨角兵衛のみ名を獅子に存する者、豈異ならざや、予此に感ざる所あり、因て大神樂の太平樂より出た事も事を論じ併せて以て角兵衛獅子の稱に及ぶとあり、又榊原芳野氏の説に云く獅子舞の必らぎ二個を須ちて舞ふ、我前編那珂氏の後足を補はん、とす、是沒緊要と雖も併て全壁と爲んが爲なり、余書上に目觀せし所の其初の唐樂に起る而其原、即西涼の伎なり、白氏長慶集四

新樂府に西涼伎、假面胡人、假獅子、刻木爲頭、絲爲尾、金鍍眼、睛銀帖齒、奮迅毛衣、擺双耳、如從流沙、萬里來、下畧此篇、結句に忍取西涼弄爲戲句とあるを見れば、是西涼人の戲舞あるべし、己に上文の如く行われしと以て我國にも之を傳へし、事朝野郡載二、文筆圓明寺供養式を載せて、右大辨源經信作曰く、先新樂次古樂各一節、又共一節、獅子出臥舞臺、異坤次調臺、越調各一節、雅樂寮率人進立、衆僧會帷下、發音樂、新樂詔應樂、古樂臺德鹽云々、其次にも此間獅子舞、又獅子舞如前等の文あり、是當時の雅樂、雜へて舞ひしかり、然れども多く佛事に用るたり、體源抄十二の末、代々師子日記、當時大方絶侍之間、前不載、雖然爲存子細記之、元承元年十二月十七日、最勝寺供養師子在云々、保延二年三月廿三日、鳥羽院光明院供養小部清延吹之同、五年十月廿六日、最勝寺供養其他、建久六年、東大寺供養、建保二年、七條觀喜壽院供養等、皆小部氏これを

吹く事を載す又樂家録十二獅子笛相傳を載せて曰く獅子者非笙篳
 之曲唯爲橫笛秘曲而甚重之古戶部氏專勤之云々凡此曲聲樂耳傳而
 舞曲斷絶至今於攝州天王寺雖奏此舞而只其法而已云々獅子二頭昇
 于舞臺廻二返と其舞の概畧を知るべしさて樂家傳ふる上の如
 く秘曲とすれども尋常の獅子舞の世間に行はれし事古今著聞集五
 に彼失せたる御衣を被ぎて先を法師跡を敷島とて待賢門院の
 さふしなりける者被ぎて獅子を舞ひて参りたりけるこそ天神のあ
 らたし歌をめでさせ給ひたりけるとめたたく尊く覺ゆれとあるの
 尋常の戲舞もこれを行ひしなり應仁年間に觀世音阿彌が作れる
 望月の謠曲にも旅店主人此舞を爲す事見えたるの謠曲石橋より出
 たるなれども是亦此戲の行はれし事知るべし其後何時となく里間神
 樂にも雜へ行ひて行路にも舞ひし八十翁昔語上七十年前(延寶

前をいふ)の昔古の太神樂とて云々次に四足付たる大長持の蓋をと
 りて仰けにして置き其次に獅子の頭を直しとあるの其頭専ら市中
 を往來せしなり其後に至りて元祿七年刻人倫訓蒙圖彙七勸進の部
 に獅子舞惡魔を攘ふと云ふ(中略)日吉の神事田樂法師と云ふ者獅子
 の頭を被ぎてねりたるなり今の獅子舞のこれを寫したるありと云
 へるを見れば諸雜伎皆此曲ありて間よの尋常の人も戯れにこれを
 舞し事ありしあるべしとありされば太神樂の市中を往來する事ハ
 大槩二百餘年前より始まりて今も尙新年に至れば家毎に獅子を舞
 ひ歩行て錢を請へり又其輩が太鼓おどの器具ハ(一)の徽章を附たる
 ハ即ち前條に那珂氏が引用して述べられたる天下一の説より一變せ
 しものからんこれを世に丸一の太神樂と云へり○門禮者との相互
 ひに門口より新年の嘉儀を云入るゝを云へり

梅が香といへるに通ひせて梅が笠木と受

前條より新年市中の景状を云かけしより春の景

物ものの梅うめが香かほといへるに通とおひせて梅うめが笠かさ木きと受うけ三圍さんゐの華表けをさして云述いしなり但たゞし笠かさ未まとハ華表けの横木よこぎとさして云いり

○催馬樂うまがしに梅うめの花笠はなかさと云いるあれハ因よに茲こゝにさるせり

青柳あおやなぎを片糸かたいとによりて黄鳥わうちうのぬふてふ笠かさハ梅うめの花笠はなかさ

○三圍さんゐハ隅田河ぐまたがわの名區なまきにして稻荷いなぎの社名しゃななり其神像かみづかハ弘法大師こうぼうだいしが自作じやくの勸請くわんきやうなりしを元和年中げんわちゆう三井寺さんせいじの源慶僧都げんけいそうどうこれこゝを再興さいきやうせしと云いり此社こゝハ慶長けいぢやうの頃ころまで現今いまの地ちより南みなみの方かた小梅村こめいむらの田中たなかハありと故ゆゑに土俗どじやく或あるハ田中稻荷たなかいなぎとも云いふことぞ

土手と受けその堤の上に諸鳥の百様に轉る聲を鳥道の唱歌に比

り土手どてと受うけその堤つづみの上うへに諸鳥しよちうの百様ひやくさまに轉まる聲こゑを鳥道ちうだうの唱歌かに比ひ

へ又また其三絃さんげんの合彈がうだんを霞かすみの引ひよかけて云述いしなり○雍州府志おんしゆうふしに云いく

乞巧人きせうじん自元日じげんじつ至十五日しごふじつ着笠あはせ以白巾しろきん覆面おほも而敵手てきて唱祝語なむかひ倚門戶よかど請米錢こゝろ

是號敵こゝろ與次郎よつじやう又稱鳥追とりお元民間出げんかんい自道拂田みちほり嘯鳥せうちう辭者ことば也云々いされハ元

來男子きたなんしのみありしを何なにの頃ころより歟や婦女にょにょの伎わざとなり世よに女太夫にょたふと稱な

して今いまも尙新年なうしんに至いたれば編笠あまがさを冠かぶり三絃さんげんを彈ひて市中いちゆうに錢ぜにを請こへり

思ふ君に逢ふ夜半の誰も

あらぬやうにとの意いを土地ちの各おのの白髭しろひげの森もりにかけて云述いしなり假かり

令さハ人目ひとめの關せきを越こへと云いふが如ごとし○白髭しろひげ明神めいじんの森もりハ隅田河ぐまたがわの堤つづみの

下したにあり其祭神まつりかみハ猿田彦命さるたひこのみことにて天曆てんりき五辛亥年ごせいかいねん慈惠じゑ大師だいし關東かんとう下向げかうの

頃ころ靈示れいしに因より近江國志賀郡おんげこくしやがぐん打下おちより此地こゝに勸請くわんきやうし給たまふと云いり

前條にあふ夜と云

より待まちの意いをもてまつ乳山庵崎にゅうさんあんさきと云いかけ又またその鐘かねが淵ふちをかね言い

と受けて婦女の意衷を云述しなり但し豫言のかねてより云置る詞
を云へば豫事と云る義もあふあり○真土山の淺草今戸橋の南詰に
て山谷堀の近傍にあり待乳或は信士に作り又萬葉集に亦打とす契
沖阿闍梨云く亦打と書てまつちとよむ多宇の反津おればかりと
云々其山上に大聖歡喜天の宮あり別當の天台宗にて金龍山本龍寺
と號く本尊の大同年中の勸請にして往昔齋藤別當實盛が深く信仰
せし所の靈像なりと云り○萬葉集よ

亦打山暮越行而廬前乃角太河原爾獨可毛將宿 辨基
月影のそそや庵崎すみた河 家隆

越てまつちや山のかひより

○新千載集に

誰にかもやどりいとひまつち山

定實

夕越行のあふ人もあし

○秋風抄に

まつち山夕越行けハ風寒み

季廣

すまた河原に千鳥なくあり

○回國雜記に道そがら名所とも多かりける中にまつち山といふ所

よてとありて

いかぞ我九のめもをかぬ東路の 道興准后

まつちの山にけふのきぬらん

時雨てもつるにもみちぬまつち山 同

落葉を時とこがらしぞふく

○戸田恭光入道茂睡聖天宮の傍に碑を建り其碑面に
あえれじの夕越て行人も見よ 茂睡

まつちの山にのこそ言の葉

○井蛙抄八雲御抄等の書に萬葉集に載せたる辨基法師が真土山の
 詠を駿河國とを催馬樂注秘抄宗祇の名所方角抄等に入大和紀伊の
 國境とあり藻鹽草よハ武藏國に入れたり又或書に云く大和に信土
 山角田川ありて廬崎あり駿河に隅田川庵崎ありて真土山なとたゞ
 此武藏にハ真土山角田川庵崎ともにありて全くそなわれりとをさ
 れどこの地に真土山庵崎あるハ後人萬葉集よ因て號けしものなり
 と云々又西山公の釋萬葉集にも此書の勅撰の體にあらざるよと論
 ぜられたり然る時の辨基法師の和歌も駿河國へ紛れ入りしものな
 らん歟尚隅田川の條下に解べし○英一蝶が戲作の唱歌ありとて專
 ら世に知られたれば因に茲に記せり
 待乳まづんで梢のりこむ今戸橋土手の相傘片身がりの夕時雨

君をおふへハあハぬむかしの細布

○庵崎ハ隅田河の名區にして請地村秋葉宮の邊りを唱ふといへど
 未詳かならど澄月歌枕に武藏國へ入れ夫木抄藻鹽草等よ下総國へ
 入れたり又紫の一本にハ小梅村の出崎を庵崎と云ひ往昔本所の地
 入海にて洲崎殊に夥しくあり故に五百崎に作りしとも云り

○新後拾遺に

我ぬめにむすびもをかぬ庵崎の

尚長

隅田河原に宿やうらまし

○建保名所百首に

今宵また誰宿からんいほささの

順徳院

そみだ河原の秋の月かけ

○鐘が淵ハ隅田河荒川絞瀬川の三俣にして往昔普門院(或ハ橋場村)

長昌寺と云ふ梵刹の鯨鐘此淵に沈没より示號くと云り普門院の隅田河三俣の城中にありしを元和二丙辰年其頃の住職榮真地をトして寺院を今の龜戸村に移せる折過失て鯨鐘を水中に投ぜしとも云り

あつちの申す事なる事なりぬ 前條に述し如く思ふ君と豫てより

何時逢見んと契りおける中なれば最樂しく最面白くと特更に詞を惹起して云述しなり

撫ぬまへば庶民その德澤に化し自づから命と延ぶと其泰平を壽きて云述しなり○唐の太宗の頃天子生誕の日を千秋節(即ち今いふ天

長節なり)と云始めしより総て泰平を賀する奏樂の名を千秋樂萬歳樂と唱ふるとの説あれども何奈にや又俳諧題秋の部に千秋樂と云

へる季ありて五穀豐饒を祭る事をよめり

首尾の松が枝と云か

けしより松竹に因みて竹町と受け其又渡守も好機に遭遇てといへる意を云述しなり○首尾の松の遠草米稟の東岸にありて水面に臨めり古松なり江戸名松十八公の一にして能く世人の知る所あれば省畧きて云はざ○竹町の津渡の舊名花形の津渡と唱へ中之郷竹町(本所區)より淺草材木町への船歩なりしが今の駒形に新津渡出來しより其蹟絶えたり

前條に云ふ渡守が目出度此處に住むといふ意

よりそみに通らせ隅田川と受けて云述しなり○隅田河の萬葉集に角太に作り舊本伊勢物語に墨田に書き中將の集(眞淵翁云く中將の集といふ葉平が家の集をいふ云々)に角田とあり八雲御抄東鑑等に

隅田とす或説に往古ハそだ河と云ハ又更科日記にあすだ河とす棟
梁集に云くむさしの國と下総の中にある河とそみた河といふ古今
和歌集伊勢今ハむかしおどの物語に見ゆ八雲御抄夫木抄松葉名所
集歌林名所考袖珍歌枕秋の寐覺なごに下総と注せし葛飾郡にす
みたの里ありてそこよおこれる河の名なれハあるべし更級日記に
あすだがはとあるハあもじ一字あやまれるにや夫木抄にそだの河
原ともそだの渡ともよめり義經記にすんだとも書たりかゝれば
すみだともそんだともすたともいふ或ハかよはし或ハはぶけるこ
とはにてみなおあトこゝろはへになんありける吾妻鏡もむさしの
くこの人葛西の六郎平家物語におなじ國人かさいの三郎などいふ
がありこはその住所の名を族稱にせしおれハ葛西のこほりを武藏
に管ありしあかしとすべし建保の名所百首歌枕名寄新撰歌枕名寄

机右抄歌枕玉叢抄拔書角田川謠詞などにもすみだ川を武藏の名所
とせれば建保の頃より後こほりも川もむさしのくはは隸たる也
源平盛衰記平家物語に隅田川ハむさしと下総の境といへるハ古今
集や伊勢物語よ上れることはのかさりおれハとら迄勅撰名所和歌
抄出名所方角抄梅若權現の縁起にハ二國に涉れりとすさてふたハ
ひもとの下総にかへされけんことハ北國紀行あつまちの累河越記
なごにいつ後よ今のごとく武藏の郡に定られしハ貞享元祿の間な
らんこと江戸総鹿子大瀬田問答龜戸の善應寺の鐘のことがさ中
田氏が家にもたる水帳のうえおみ等なごかんがへてあるべしされ
ハそみだ川ハはじめは下総中ごろハ武藏その後また下総今ハむさ
しの名どころ也云々隅田河ハ諸國に同名多く辨基法師が亦打山暮
越行而示々詠ぜし歌にある角太河を井蛙抄にハ駿河とハ契沖阿

閑梨が萬葉代匠記眞淵翁が萬葉解宣長翁が玉の小琴千蔭翁が萬葉略解等にも亦紀州とす又平野知秋氏の説に云く太田道灌江戸在城の時老子の語を取り其燕居の所を靜勝軒と號し又杜工部の窓含西嶺千秋雪門泊東吳萬里船の二句を取り其西の室を含雪と號し東の室を泊船と號す又此句の意を取りて靜勝軒眺望の佳なると詠ぜし歌一我庵の松原續き海近く富士の高嶺を軒端よを見ると云り是徧く世人の知る所なり一説に此歌の寛正年間道灌上洛の時勅して其居の眺望を問ひ給ひに答へ奉りし歌とも云り江戸名所圖繪にハ此説を取りり又城西の瀧野川村の林巒溪流の勝を受し此にも別墅を作り今靜勝寺といふ禪刹ハ即ち其遺址あり襟度の概思ふべし遂に風雅を好むの餘り隅田川の古よりの名區なるを愛して忽ち萬葉集の眞土山夕越行ハ庵崎の隅田河原に獨かも寐んと云る辨基

が歌と思ひ出て彼大和吉野川の末流にして紀州に入る角田川の名と相同じきを以て即ち此水濱の金龍山を紀の眞土山と擬へ其名を肩と又庵崎といふ地を作り設け又志賀の關と擬し關屋の里をも設けて遂に又秋夜長物語の梅若の故事を思ひ出て隅田川を近江の湖水と擬へ一の古塚ありしを修理して梅若の塚とし又自髭の社と勸請し牛御前社を叡山の山王に擬し一小寺を建て三井寺と稱す後常泉寺と改め又長命寺と改む東岸ハ近江西岸ハ大和紀伊の名區に擬へり西ハ富岳東ハ内洋の勝を收めて園中の物とし左に顧みれば大和紀伊近江等上國の名區を几席の間に攬れるハ其風趣河原左大臣が陸奥の千賀の塩竈を六條磧に撰作せしに同トくして其意匠の巧なると規模の大あるとハ殆ど之に過ぐ云々されハ隅田河の源流ハ信濃甲斐及び上毛等の國々の山谷より發し武州秩父郡の諸流合衆

して之を中津川(此中間を)にへ川あかひら川浦山川など號けりと云
ひ又榛澤男衾の二郡に亘り豊島葛飾兩郡の中間を流れて千住川に
至り其下流を淺草川と云り原此舊流の千俣にながれ中川と絞瀬川
の中間に横はりて土俗これを古隅田河と唱ふる所ありと今ハ
遠く須田村の北方に残り僅に埋れたる小流とかれりとぞ
我おもふ人にみせはやもろとも

角田河原のゆふぐれの空

俊成卿

むさし野ハはや行過て隅田河

爲家卿

遠きとたりにみやと戀つゝ

聞よしも越てこそこれそみだ河

葉室頼胤卿

汀の波も花ににはひて

初花もけふこそみつれめづらしき

爲久卿

隅田河原の春をせひきて

花鳥に霞む千里やすみた河

同

船とめてみる遠近のはる

筑波根の峯ふさおろす春風よ

爲村卿

隅田河原の花をほころぶ

隅田川の和歌ハなる數多あれと茲に省きつ

隅田川の和歌ハなる數多あれと茲に省きつ

隅田川の尽せぬながれと清元一家の流派に比へ又その曲節ハ玉椿
の八千代かけて榮へ行き實ハ梅が香の薰る如く四方に芳しき名を
傳播と壽きて云ひ取結たるなり○又左に記す所の太田蜀山先生の
清元延壽の四字を句の上に置いて讀せし狂詩ハ必らき清元稽古本が
紙末に出して今も此流儀の明證とす

清怨擗絃曲貫珠

元聞此調滿東都

延招共賞陽春雪

壽席歡場待太夫

遠櫻山人

又長府侯(即ち梅の戸真門君)が吉原の狂詠ありとて或人より聞得た
れば因に茲に記せり

三千の美女のあれども此廓に

さくらを手折る理不戻のなと

○此書印刷竣功の後までの校閲を一字も編者に請さりければ備書
印刷者に謬られて稿本と同じからざるもの多きを答めて云云とい
ひし書肆より懇談數回に及びけるを尙聽さらん流石にていふ
甲斐もなく己にけり

紙鳶堂風來又識

清元名曲梅の春通解終

東京府平民

渡辺重丸方寓

編輯人

河原英吉

日本橋尾木原店七番地

明治十六年

東京府平民

七月十二日御届

清元版元

出版人

加藤忠兵衛

同屋住吉町壹番地

同年十月廿六日出版

東京府平民

發兌人

法木徳兵衛

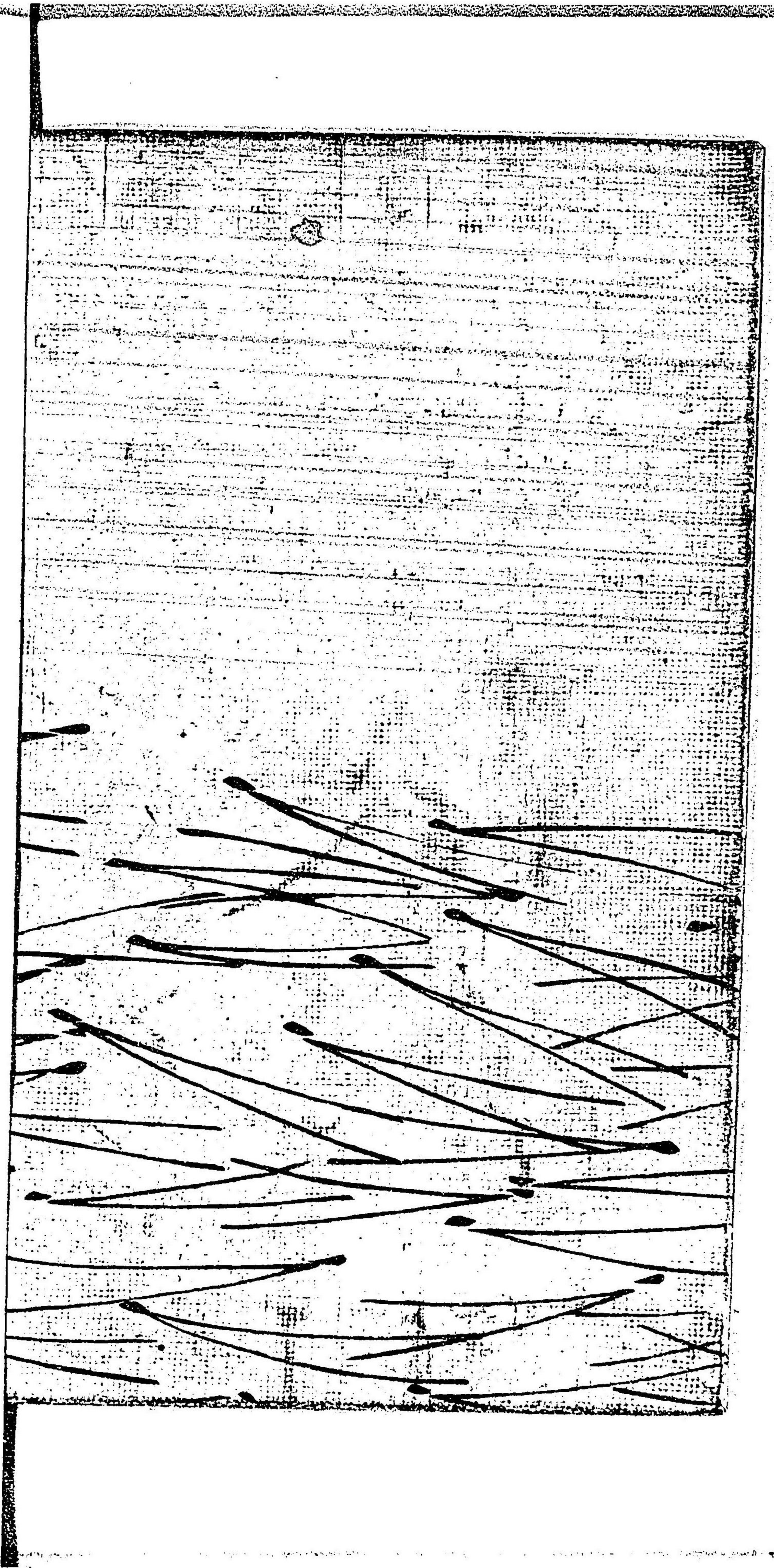
同屋元大阪町拾壹番地

東

京

横山町三丁目
 通油町
 兩國吉川町
 南傳馬町一丁目
 新葭町親慈橋
 淺草瓦町
 日本橋通三丁目
 同壹丁目
 南傳馬町二丁目
 人形町通長谷川町
 馬喰町二丁目
 木挽町
 神田雉子町

辻水松山林山森小大荒福網萬巖
 岡野木本本本本倉井田嶋
 文慶平吉平吉順平錢孫喜三熊龜字
 助郎吉藏吉郎郎郎郎衛郎吉吉堂堂



073803-000-6

768.48-U545Kk

梅の春通解

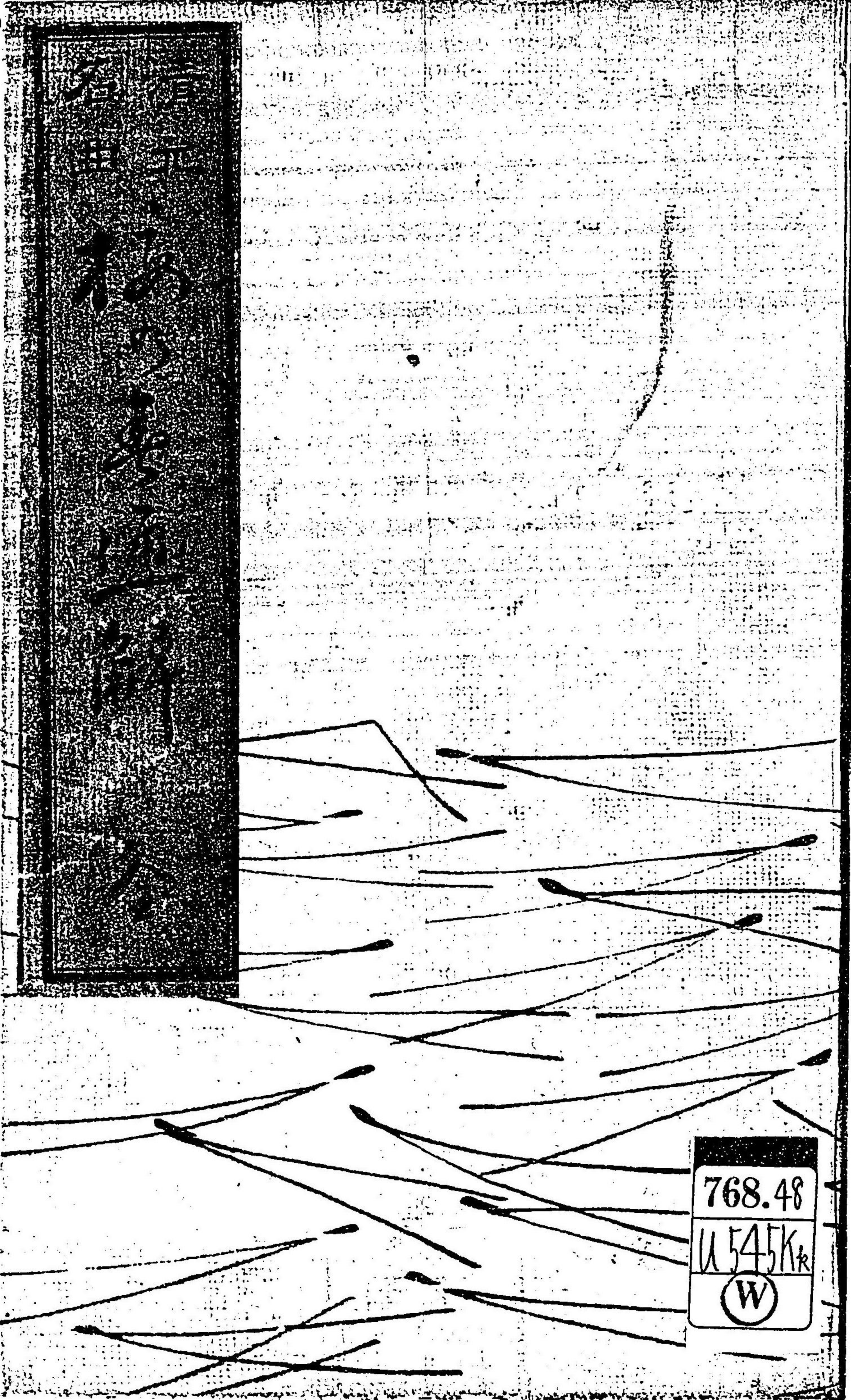
河原 風来 (紙堂) / 著

M16

CEI-0371



768.48
U545Kk
W



768.48

U 545K

W